

(銀のエンジェル賞 中学生の部)

色彩

中二・橋本 采奈

「コンコン」

と叩いた後に扉を開けると木材、ボンド、絵の具の独特な匂いが私の鼻にツンと届いた。近くにある杖置き場に杖を置くといつもの凜とした声が聞こえる。

「先生。実加ちゃん来ましたよー」

すると美術室の物置きから

「実加ちゃん。こんにちはー」

ほがらかな声が聞こえた。先生だ。床にあるブロックを目印にして私は自分のキャンバスの前に立ち止まる。

「こんにちは、実加ちゃん」

左からさっきの凜とした先輩の声を聞いた。

「こんにちは、先輩」

自分のバッグから絵筆と絵の具とやわらかい紙を手にしたとたん「コンッ」

と杖置き場から音が響いた。

白杖が倒れてしまったのだ。多分さっき置いた自分の白杖が固定されていないなかったのだろう。私は急いでブロックの上を歩いて杖置き場へ向かおうとする。

「いいよ。私が置いておくから」

先輩は立ち上がって杖を固定してくれた。

「ありがとうございます」

先輩の好意に甘えて私は水道に向かつて歩きバケツの中に水を入れる。いつも通り自分のキャンパスの前に立って定位置にある青の絵の具を手にとって筆をキャンパスに近づける……。描けない。そのまま何分たったのだろう。

「最近ずっと筆の音が聞こえないけれど、大丈夫？」

先輩の声に驚いた私はとっさにウソをついてしまう。

「大丈夫、です」

先輩は私がウソをついていることに気がついたのだろう。

「そう」

あまりにも凧いだ声で先輩は言った。心が痛んだ。言わなかったことに後悔する。言いたい。言いたい。

「先輩、やっぱり大丈夫じゃないです」

「そっか、何があったの？」

——やっぱり言いたくない。言ってしまったら先輩も傷つくかも。先輩は私と同じ全盲だから。考えがぐるぐると心の中で渦巻いている。苦しい。どうしよう。どうしたら——

「ねえ、実加ちゃん。私の作品を触ってくれない？」

先輩の声は私を心の渦から救ってくれた。いつのまにか先輩は筆を止めて扇風機の音がする所にいるようだ。私が歩いていくとキャンパスを私のいる方向に向けてくれた。触ってみると何かうねうねとした線に当たる。これは何だ？ たどっていても只適当に線を描いたとしか思えない。

「わからないです。何ですか？ これ」

先輩は予知していたように答えた。

「空を描いたんだ。今実加ちゃんがなぞっているのはきつと雲だよ」
もう一度線をなぞっていると、見たことのない空が心に浮かんで

きた。先輩はよく見たことのないものを描く。前はオーロラだった。

「どう？ 私の絵を触って少しは落ちついた？」

先輩は椅子をひきずりながら言う。

「はい。ありがとうございます」

どうやら先輩は私が話すことをためらってたのもお見通しだったようだ。私は声を絞り出す。

「この間、桜ヶ丘であの青い花をデッサンしていたんです。そして——」

「お姉ちゃん何を描いてるの？」

座っていた私は上を見上げた。小さな男の子の声だ。泥遊びをしていたのだろう、男の子から泥の匂いがした。

「この花をデッサンしていたの」

私は男の子に絵を見せる。

「えー。お姉ちゃんこれは花じゃないよー。本物のお花はね」

思わず私は遮った。

「ごめんね。お姉ちゃんは目が見えないから上手なお花が描けないんだ」

自分の大切な絵を卑下されたくない一心で言葉を連ねた。自分で自分を傷つけているのにも関わらず。

「ねえお姉ちゃんは何で目が見えないのに絵を描いてるの？ 変だよ」

「変だよ」思っていたよりもその言葉は心に深く刺さった。こんなに麗らかでおだやかな春の日とは対照的に心はどろどろとしたなかでいっぱいになった。そして私はその男の子から逃げていた。

話を聞き終わると先輩は椅子から立った。

「その男の子が言っていた事は正しいんだと思います。私だって自分の絵は変だと思うから、でも」

気がつけば自分は早口になっていた。普通の人だったらそんなささいな事だと思うだろう。それでも先輩は聞いてくれた。

「でも、それから描こうと思うたびに筆が止まるんです」

少し間が空いた後、立っている先輩が歩いた。歩く音が美術室に響く。

「じゃあ実加ちゃん、私と一緒に描いてみようよ。そしたら筆は進むよ」

先輩は絵を描くのが上手だから、誰に見せても変だとは思われないだろう。そう考えてみると確かに筆は進みそうだ。

そう思っていると先輩は私の腕をつかんで私のキャンバスの前に引かれていった。私のキャンバスはまだ鉛筆の下描きしかしていない。私は先輩にパレットと絵筆を渡した。すると先輩に手を引かれて座った。いくら暖かい春でも2人で座るとおしくらまんじゅうみたで中々暑い。先輩からは花の匂いがした。

「じゃあ実加ちゃん、一緒に筆を持つとう。あと何を描けば良いか、教えてくれる？」

「この青い花です」

私は先輩に花を渡すと先輩は何分間か花を触り続けた。私と同じ方法で絵を描くのだろう。そして先輩は筆を持ったまま触り続けた。終わったのだろう。青の絵の具を筆にのらせた。先輩は腕をスウーッと動かした。久々の感覚だ。時折先輩と私は青い花を触って構造を確認する。描いては、触って、描いては、触って：そうやっていると自然に口の中から言葉が出てきた。

「自分があんな言葉で傷ついたのがショックだったんです」
また一つ言葉が出る。

「周りの目なんて気にしたくないのに、絵を描くとどうしても思い出すんです」

また1つ言葉が出る。

「私は、どうしたら良いんですかね。描きたがっているのに描きたくない」

自分の思いを吐き出しているといつの間にか絵は完成して扇風機の前に私と先輩が座っていた。

「私と実加ちゃん、描いた絵を触ってごらん。そしたらきっとわかるはず」

先輩はいつもの凜とした声で言った。触ってみると絵の具はどうに乾いていた。花の輪郭、茎、触っていると何か違和感があった。どうしてだろう。先輩は絵が上手なのに何か「変」に感じる。

「変でしょ？ 私も昔、友達とやっていたのだけど。相手が何かを描いた作品だったら普通に思うのに。相手と同じものを描いてると相手の描いている絵を変に思うんだ。さっきの男の子もこの青い花を描いたことがあったんじゃないのかなあ」

そうだ。なんで忘れていたんだろう。

「変な事は当たり前なんだよ。一つの物でも人によっては考え方も見え方も全く違う」

「先輩、ありがとうございます」

深く礼をした私は足早に自分のキャンバスへ向かい、バッグから新しい画用紙を取り出して机の上に広げた。

「あと実加ちゃん、私は実加ちゃんの絵が好きだよ。触って想像するとこんな事伝えたいんだっていうのが良くわかるから」

胸がいつぱいになってゆく。

「ありがとうございます」

そう言って私は筆を持つ。

開けた窓から昼の暖かい空気と春の色どりの花の匂いが届いてくる。また絵が描きたい。何を描こう、建物？ 人？ 自然？ そうだ、感じた事のないものを描こう。空？ 砂漠？ …色だ。私が感じたことないもの。お義母さんが言っていた。桜は本当に綺麗な色だと、町の皆が言っていた。夕焼けの色は素敵だと。大丈夫、良い絵がきつと出来る。そう思いながら筆に水をつける。青をつける。

—— スウツと心の中に音が響いた ——
